

洋16-154

「人間の値打ち」★★★★

2016（平成28）年11月1日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本：パオロ・ヴィルズィ

原作：スティーヴン・アミドン『Human Capital（人的資本）』

脚本：フランチェスコ・ブルーニ、フランチェスコ・ピッコロ、

【ベルナスキ家】

カルラ・ベルナスキ（ジョヴァンニの妻、元女優）／ヴァレリア・ブルーニ・テデスキ

ジョヴァンニ・ベルナスキ（ミラノにオフィスを構え、富裕層相手の投資ファンドで儲けている富豪）／ファブリツィオ・ジフーニ

マッシ（マッシミリアーノ）・ベルナスキ（高校の同級生セレーナと親密な、カルラとジョヴァンニの一人息子）／グリエルモ・ピネッリ

【オッソラ家】

ディーノ・オッソラ（オッソラ不動産経営者）／ファブリツィオ・ベンティボリオ

ロベルタ（ディーノの後妻で妊娠中の心療内科医、ルカのカウンセラー）／ヴァレリア・ゴリノ

セレーナ・オッソラ（名門私立高校に通うディーノと先妻の娘）／マティルデ・ジョリ

【アンブロジーニ家】

ルカ・アンブロジーニ（大麻所持で逮捕されカウンセリングに通っている若者）／ジョヴァンニ・アンザルド

ダヴィデ（ルカを利用し姉の保険金暮らししているルカの亡き母の弟）／パオロ・ピエロボン

【その他】

ドナート・ルッソマンノ（カルラの信頼を得て芸術監督として劇場再建を支える劇作家）／ルイジ・ロ・カーショ

ジャンピ（ディーノの取引銀行の融資係）／ジージョ・アルベルティ

刑事（ウェイターひき逃げ事件の捜査担当）／ペーボ・ストルティ

アドリアーナ・クロゼッティ（カルラの友人で息子同士も同級生のクロゼッティ古美術店経営者）／シルヴィア・コーエン

ファブリツィオ（自転車で帰宅途中でひき逃げされた被害者のウェイター）／ジャンルーカ・ディ・ラウロ

2013年・イタリア映画・109分

配給／シンカ

<この面白さは『ワイルドシングス』以来！>

本作は上流、中流、下流とハッキリ階層分けできる3つの家族が、冒頭に提示される「交通事故」を巡って織り成す物語。冒頭シーンの後は、「第1章 ディーノ」「第2章 カルラ」「第3章 セレーナ」「最終章 人間の値打ち」という4つの章に分けられ、それぞれの章のタイトルになっている人物を中心に、それぞれの章の物語が進行していく。各章は密接につながっているうえ、パオロ・ヴィルズィ監督はクロスするシーンを少しずつ見せてくれるので、109分という時間内でのスピーディーな展開にもかかわらず、時系列の整理や入り混じった人物と物語のつながりが、よりわかりやすくなっている。

こんなメチャ面白い映画は、私が映画評論を書く1つのきっかけになった『ワイルドシングス』（98年）（『シネマルーム1』3頁参照）以来だ。『ワイルドシングス』ではスージーとケリーという小悪魔のような2人のギャルがストーリーを引っ張ったが、本作ではそれと同じような小悪魔的なギャルで、オッソラ不動産を営む中年男ディーノ・オッソラ（ファブリツィオ・ベンティボリオ）の一人娘セレーナ・オッソラ（マティルデ・ジョリ）が、『人間の値打ち』という本作本来のストーリー上はもちろん、冒頭の交通事故の真相を知るキーウーマンとして大きな役割を果たすのでそれに注目！

近時は「この映画を観ることができて本当に良かった。幸せだった」と思える「怪作」に出会えることが少ないが、本作はまさにそれ。ちなみに、本作は2014年のイタリア・アカデミー賞で7部門を受賞するとともに合計40以上の賞を受賞しているそうだがそれもむべなるかな！

<原題も英題も「人的資本」。その意味は？>

本作の英題は『HUMAN CAPITAL』。イタリア語の原題『IL CAPITALE UMANO』も、それと同じらしい。それに対して、邦題は『人間の値打ち』とされているが、それって一体ナニ？原題も邦題もその意味は？

本作のパンフレットには、「エコノミスト」の肩書きで浜矩子氏が「カネの切れ目は出会いの始まり？」というコラムを載せている。浜矩子氏と言えば経済問題についてテレビによく登場する同志社大学大学院の教授で、アベノミクスを「アホノミクス」「ドアホのミクス」「妖怪アベノミクス」と呼ぶほどの、反小泉純一郎、反安倍晋三、反竹中平蔵の筆頭格・・・？そのため、私は彼女の発言に反発することが多いが、「カネの切れ目は縁の切れ目。だが、カネの切れ目は出会いの始まりにもつながるかもしれない。その可能性を秘めているところに、人間のよさがある。それが、人間の値打ちだ。そこが、人的資本との違いだ。」と結論づけたこのコラムは興味深い。

<邦題の意味は？なるほど、なるほど・・・>

もっともこのコラムを読んでも、邦題の「人間の値打ち」の意味はわからない。しかし、本作ラストに「被害者の遺族には、自動車保険より21万8976ユーロの慰謝料が支払われた。」「慰謝料は被害者の推定収入額や将来性、遺族の人数や関係などを考慮して算出される。」「保険用語では『人的資本』と言う。すなわち『人間の値打ち』だ。」の字幕が表示されると、何だこの邦題は、私が42年間の弁護士生活の中でずっとやってきた交通事故による人的被害の損害賠償額のことだったのか、と納得(?)できた。

交通事故で死亡したのが、パーティーの仕事を終えて自転車で帰宅中であったウェイターのファブリツィオ（ジャンルーカ・ディ・ラウロ）でなく、ミラノにオフィスを構え、富裕層相手の投資ファンドでポロもうけしているジョヴァンニ・ベルナスキ（ファブリツィオ・ジフーニ）だったら、その賠償額はHow Much?その額は天文学的数字になっているはずだが、それだけで人間の値打ちをホントに測れるのか否かは大いに疑問だ。

ちなみに、私は交通事故の講演をする際、塩谷俊監督の『0（ゼロ）からの風』（07年）（『シネマルーム15』214頁参照）の予告編をよく使っていた。また、交通事故の被害者に対して保険会社が「命のメニュー」を提示するやり方に不平不満をぶちまけた、二本雄策氏の『交通死一命はあがなえるか』（1997年、岩波新書）をよく教材として使っていた。したがって、今後もしそんな講演があれば、是非本作も活用しなければ・・・。

<イタリアは鉄壁のクラス社会！階層社会！>

本作のパンフには「イタリアは鉄壁のクラス社会である。80年代の終わりに数年間、ミラノに住んでこのことを痛感させられた。上流、中流、下流という単純な階層分けのみならず、貴族階級の中にも明確なクラスがあり、もちろん最上級は王家である。」の書き出しで始まる、光野桃氏（エッセイスト）の「悪態と美質」と題するコラムがある。近時の日本は、とりわけ朝日新聞を中心に小泉内閣と安倍内閣における「格差（社会）の広がり」を批判する論調が強いが、私はそれに大反対。同コラムを読めば、イタリアに比べると日本がいかに階級・階層の少ない「一億総中流の国」かということがわかるはずだ。

もっとも、同コラムが強調しているのはイタリアの階級・階層分化とその意識の高さではなく、上流、中流、下流を問わず一皮むいて一人一人の人間を見れば所詮みんな同じということだ。それをより具体的に言うと、怒り、激情にかられて悪態をつけば、人間は上流、中流、下流を問わず誰でも同じということだ。なるほど、なるほど・・・。本作で上流を代表する富豪のジョヴァンニ、中流を代表するオッソラ不動産経営者のディーノ、下流を代表する大麻所持で逮捕され、未成年であるためカウンセリングに通っているルカ・アンブロジーニ（ジョヴァンニ・アンザルド）の怒りぶり、悪態のつきぶり等を見れば、そのことがよくわかる。

<アメリカの原作から舞台をイタリアのミラノに！>

本作の原作は、アメリカの作家スティーヴン・アミドンの小説『Human Capital』。これは10年前のアメリカのコネチカット州の裕福な郊外を舞台にした物語らしい。その原作が今の時代のイタリアを象徴していると考えたイタリア人のパオロ・ヴィルズィ監督は、舞台を大胆に北イタリアのミラノに移し、イタリアの物語にしまったわけだが、それが大成功！私にはそう思う。

本作のストーリーの軸は、冒頭に提示された交通事故の加害者は誰か？というもの。しかし、本作はそれをめぐる犯人捜しのサスペンス劇ではなく、あくまで上流、中流、下流の3つの階層に分類された多くの個性豊かな登場人物たちが織りなす人間模様の面白さと、そこから見えてくる人間の本性を描くものだ。「第1章 ディーノ」では投資ファンドのもうけで大富豪になっているジョヴァンニに必死で取り入るディーノの姿が、「第2章 カルラ」ではジョヴァンニのお飾りだけの妻に収められているカルラ・ベルナスキ（ヴァレリア・ブルーニ・テデスキ）の意外な「反乱ぶり」が、「第3章 セレーナ」ではジョヴァンニの一人息子マッシ（マッシミリアーノ）・ベルナスキ（グリエルモ・ピネッリ）との恋に満足できず、似顔絵を描いてくれた下流のルカに一目惚れするセレーナの二股がけの苦悩(?)が、それぞれ描かれる。そして、「最終章 人間の値打ち」でその集大成がなされることになるので、そのスリリングな展開をたっぷり楽しみたい。

<なるほどこれがイタリア人！3つの章の主人公に注目！>

私の中学高校時代はフランスを代表する俳優はアラン・ドロンやジャン＝ポール・ベルモンド、イタリアを代表する俳優はマルチェロ・マストロヤニだったが、本作の「第1章 ディーノ」に登場し、富豪のジョヴァンニに必死に取り入ろうとするファブリツィオ・ベンティボリオ演じるディーノの姿を見ると、まさにこれぞイタリア人！そう思うってしまうファブリツィオ・ベンティボリオの演技に注目！

次に「第2章 カルラ」では、いかにも頼りなさげなジョヴァンニの妻で元女優のカルラが、老朽化した劇場の再建に生きがいを見出す中で見せていく大胆な変身ぶりがすごい。劇場再建のための運営委員会の芸術監督に推薦した劇作家ドナート・ルッソマンノ（ルイジ・ロ・カーショ）との突然の不倫騒動にはあっけにとられたが、この男との縁の「切り方」もいかにもイタリア風だから(?)それにも注目！

そして「第3章 セレーナ」では、娘のセレーナがジョヴァンニの息子であるマッシと付き合っていることまでネタにしてジョヴァンニに取り入ろうとしている父親ディーノを軽蔑しながら、自分も新たに恋心を抱いた若者ルカとの恋の成り行きに悩む、いかにもイタリア娘らしいたくましい生き方に注目！『ワイルドシングス』で見た小悪魔のようなアメリカ人の2人のギャルは相当なワルだったが、それに比べるとセレーナは反抗しているものの意外にウブ。もっとも、本作ラストでは、相変わらずまにまにしていたパソコン上のルカ宛のメールを父親に勝手に見られてしまうという不始末が顕著。これは、ヒラリー・クリントンのメール問題のように「言い訳」のできないものだったから、大チョンボだ。「最終章 人間の値打ち」は、ディーノがこのメールを見たことによって全く想定外の展開になっていくので、そんな大チョンボを含めてイタリア人ギャル、セレーナの活躍に注目！

<投資ファンドでここまで？富豪のお屋敷に注目！>

本作の全編を通じる舞台になるのが、『ゴッドファーザー』3部作で見たヴィトー・コルレオーネのお屋敷と見紛うばかりの広大なジョヴァンニのお屋敷。アメリカではブル付きの邸宅はある程度のお金持ちなら当然だが、日本と同じく国土面積の狭いイタリアで、投資ファンドのもうけだけでこれだけのお屋敷を構えるとは立派なお屋敷だ。ブルやテニスコートはもちろん、本作では投資ファンドの客を招いて開く立派な会議室等の施設を含む広大なお屋敷に注目したい。

もっとも、ジャンピ（ジージョ・アルベルティ）が勤める銀行から70万ユーロ（約7500万円）もの借金をしてディーノがやっと入会させてもらった、利益率30~40%という投資ファンドはいわゆる「空売り」をやってもうけていたらしいから、ヤバくなってくると一気に相場が下落するのは必至！本作もそういうストーリー展開になっていく。そうすると、まさに「カネの切れ目は縁の切れ目」になるはずだが、本作では前述した浜矩子氏のコラムのように「カネの切れ目は出会いの始まり」になっていくので、それに注目！

各種各様の赤裸々な人間模様を展開していく中、ジョヴァンニのファンドは遂に破産宣告？そう思いきや、アレレ、ラストは意外なハッピーエンドに・・・。

<交通事故の真相は？犯人は？>

私は自宅と事務所を毎日（電動機付）自転車で通勤している。道路交通法上、「自転車は車道の左端を走るべし」とされているが、現実にはそれは難しく、歩道を走ることも多い。もっとも本作冒頭に見るように、車歩道が区別されておらず車1台がやっと通れるだけの道なら、自転車は迷うことなく道路の左端を走ることになるが、後方から車がやってくると当然接触の危険が・・・。しかして、ファブリツィオの自転車を車でひっかけて転倒させ、大ケガを負わせながら救護義務を果たさず、現場から逃げていった犯人は一体ダレ？

ウェイターのファブリツィオが自転車で帰宅の途についたのは、マッシやセレーナが通うグレゴリウス14世高等学校で行われたコッタファーヴィー賞の受賞パーティーの後片付けが終わった後だが、パーティー終了後は車を運転して帰った参加者も多いはず。パーティーに出席し、ジョヴァンニ夫妻のテーブルに同席していたディーノとその妻ロベルタ（ヴァレリア・ゴリノ）は、妊娠中のロベルタの身体の調子が悪くなったため急遽パーティーを抜けて病院に赴いたが、セレーナはパーティー終了後ロベルタが乗って来ていた車で家に帰らず、すぐにルカの家に向かったらしい。他方、コッタファーヴィー賞を逃したマッシはそのショックのため友人のクロゼッティ家で泥酔し、母親のカルラの携帯に迎えを頼んだものの、カルラが電話に出なかったため、セレーナがマッシを迎えに行くことになったらしい。その結果、ルカが運転するマッシの車と、泥酔したマッシを乗せてセレーナが運転するロベルタの車が2台並んでジョヴァンニのお屋敷に向かっている途中に、本作冒頭の自転車事故が起きたらしい。すると、ファブリツィオの自転車をひっかけた犯人は一体誰・・・？

目撃者の情報とマッシの車に付いていたキズ跡を根拠に、刑事（ペーボ・ストルティ）はマッシを犯人とらみ、ベルナスキ家のお屋敷に赴いて捜査を開始したが・・・。

<日本版のリメイクを期待！>

本作ラストに表示される字幕によれば、自動車保険から被害者の遺族に支払われた慰謝料は21万8976ユーロ。これは日本円にして約2400万円だから、日本の基準とほぼ同じだ。また、「慰謝料は被害者の推定収入額や将来性、遺族の人数や関係などを考慮して算出される。」も、前段は日本とは違うものの、後段は同じだ。したがって、ファブリツィオの交通事故による死亡によって必然的に露わにされる「人間の値打ち」をネタにして、3つの階層の登場人物たちが複雑に絡み合う本作は、日本でもリメイクできるはずだ。

日本はイタリアのように3つの階層に分けるのは難しく、上流と下流に二極化していると主張する人がいるかもしれないが、前述のように私はそうではなく、日本はイタリアよりも緩やかな階層社会だと考えている。ちなみに、かつてIT界の寵児として一世を風靡したホリエモンこと堀江貴文は今も落ちぶれているが、投資ファンドで大儲けした人物に村上ファンドの村上世彰氏もいるから、本作のジョヴァンニ役にはコト欠かない。また、ディーノほど徹底してなくても、富豪にうまく取り入って自分もおおごぼれにあずかろうとする中流の浅ましい人種はゴマンといる。さらに、覚せい剤中毒とまで言えないにしても、いわゆるドヤ街で日々の生活を立てている下流社会の人間はどんどん増大しているから、日本版『人間の値打ち』を作ることは充分可能だ。

そこで問題は、どの監督がどんな問題意識でどんなストーリーでそんなタイトルの映画をつくるかだが、日本にも才能ある監督はゴロゴロいるはずだ。邦画が原作ものに偏りすぎている昨今、アメリカの原作の舞台をイタリアに移して作り上げた本作のような刺激的なイタリア映画を契機に、日本でも誰かがそのリメイクに挑戦するのを期待したいものだ。

2016（平成28）年11月5日記